

ドバイ日本人学校での学校経営

— 開かれた学校づくりをめざして —

前ドバイ日本人学校 校長

福岡市立原北中学校 校長 江 藤 邦 博

キーワード：UAEの教育制度，国際教育，学校運営理事会，学校評価

1. はじめに

ドバイ日本人学校（Dubai Japanese School：以下DJSと略す）は、有史以来、最も大きな規模と最も早いスピードで発展を続けている注目の都市・ドバイにある。ドバイはアラブ首長国連邦（United Arab Emirates：以下UAEと略す）を構成する7つの首長国の中でも、現在めざましい発展を遂げている首長国である。新しい空港、世界一をめざすタワー、地下鉄工事、数々の高層住宅の建築等が急ピッチで進められている。また、それとは対照的に、ゴールドスークやブスークなどの昔ながらのスークが息づいている地域もある。ドバイはイスラーム社会であり、アバヤやデスターシャを身にまとった人々が街を行き交い、街中には間隔をおいて建つモスクから、祈りの時を告げるアザーンが聞こえる等、イスラーム文化があらゆるところで感じられる。

住民の8割程が外国人であるドバイは、多様なライフスタイルが見られる一方、ローカル（UAEの国籍を持った）の人々は、自分たちのイスラームの生活習慣を大切にしている。

2. UAEの教育制度

UAEの学校制度は、日本とほぼ同じで、小学校（6年間）、中学校（3年間）、高校（3年間）、大学及び専門学校（4年間）となっている。イスラームに基づいた教育システムが組まれている。公立学校に通うローカルの子どもたちは、小学校1年生から男女別学となっている。高校や大学もあるが、かなりの若者が外国へ留学している。UAEの教育の中心となっているのは、連邦教育省で、日本での文部科学省にあたるものである。また、各首長国には、それぞれの教育局がある。ドバイ日本人学校もドバイ教育局の監督下にある。

UAEでは、教育を大変重要視している。ナーサリー（幼稚園）で1、2年過ごした後、子どもたちは12年間の正式な学校に入学する。低学年の間、児童生徒は、読む学習、クルアーン（ムスリムの聖典）の学習、音楽、芸術、その他の勉強に取り組んでいる。中学年になると、多くの教科、数学、化学、地理、歴史、社会科学、体育、美術が加わってくる。低学年のうちから、英語も学習している。各期末には試験があり、試験が終わると休みに入る。学年末の試験に合格しない場合、進級できないことになっている。

また、ドバイでは人口のおよそ8割が外国人であるため、英国をはじめ米国、インド、パキスタン等様々な国の学校がある。

3. DJSの教育目標

DJSは、日本語補習学校を経て、昭和55年（1980年）、UAE学校教育法に基づき、学校として、認可されて、開校した。児童生徒数は、近年急激に増加し、平成19年度4月当初は、130名となり、平成20年3月には、152名の児童生徒が学び、なお児童生徒数の増加傾向は続いている。

DJSの教育目標は、創立以来、「自主性」「自律性」「国際性」である。

4. 国際教育

DJSは、平成12年度から2期7年間にわたり、文部科学省から、国際教育に関わる研究指定を受け、研究実践を進めてきた。ローカル校との継続的な交流を通して、UAE及びドバイを中心とした異文化理解を深め、現地理解教育を中心とした国際教育を進めている。また、児童生徒の日本語及び外国語による自己表現力の向上、実践的コミュニケーション能力の向上や、我が国の伝統文化を理解し、発信する力を高めることを進めている。

また、国際教育を進めていく上で、日本の教育がUAEの各方面から高い評価を受けていることを知る機会にも恵まれ、教職員の一層の努力を奮起する場ともなっている。

(1) 国際交流実践活動

DJSでは、21世紀の国際社会に生きる日本人の育成を目指して、全学年でアラビア語会話を週に1時間、英会話を週に2時間行っている。また、ローカル校との交流学習として、ローカル校を招待したり、訪問したりして、互いに理解して協力しようとする態度を育てている。

ローカル校との交流を企画する際、まず校長、研修部長が交流校を訪問し、校長先生をはじめ教職員と交流をし、準備を進めることから始め、その後も引き続き、交流を深めている。

以下は、実践活動の報告

① 交流校

平成18年度	平成19年度
アニーサアンサリーヤ女子小学校	ザードビン سلطان 男子校
アルキヤム男子モデル小学校	アルキヤム男子モデル小学校
ザードビン سلطان 男子校	ジュメイラ女子モデル小学校
クルトバ女子中学校	クルトバ女子中学校
ビラルビンラバーハ男子小学校	ビラルビンラバーハ男子小学校
イスラミック女子中学校	ラジ男子中学校
ラジ男子中学校	Dubai Center for Special Needs 校

② UAEの各首長国との交流

◎シャルジャ教育庁（シャルジャ：UAEを構成する首長国）から15名の校長先生の訪問（平成18年度）

◎ラサルカイマ教育庁（ラサルカイマ：UAEを構成する首長国）から36名の校長先生の訪問（平成19年度）

両教育庁からの来校があり、日本の教育システム、本校の教育目標や教育活動、本校とローカル校との交流学習、また本校の三大行事を中心とした特色ある取り組みについての説明をし、教育についての意見交換を行った。アラビア語の授業等の参観においては、授業態度やあいさつについて、「様々な取り組みについて、大変参考になった」と感謝の言葉を頂いた。日本の教育、DJSの取り組みが、各方面からの高い評価を頂いている。「21世紀の国際社会に生きる日本人の育成」に向け、教職員一同努力することを再確認する良い機会となった。

③ ザード大学との交流（平成19年11月）

DJSの児童が、UAEナショナルデーに、ザード大学に招待され、ドバイ首長国の要人、大学生の前で日本及びUAE国歌を歌い、交流を深めた。この大学からは、毎年学生がDJSを訪問し、日本の教育制度等の学習をしたり、授業参観をしており、日本の教育への関心が高く、毎年、日本を訪問しているとのことである。

④ ジュメイラモスクの訪問

DJSでは、国際教育の一環として、現地のジュメイラモスク（ジュメイラ地区にあるイスラム教の寺院）を訪問し、イスラームやモスクについての説明を聞き、その理解を深めている。

⑤ 海外修学旅行（平成18年10月：中学部・12月：小学部）

修学旅行は、隔年で実施し、小学部が5・6年合同で、中学部が全学年合同で行っている。平成18年度は、小

学部は隣国オマーンに2泊3日、中学部はギリシャに3泊4日で行い、国際教育のよい機会となった。

⑥ 砂漠キャンプ（平成19年12月）

隔年で、ドバイ近郊に1泊2日の砂漠キャンプを行い、昔ながらのベドウィンの生活を体験することになっている。砂漠にテントを張り、砂漠で宿泊することは、児童生徒にとっては、貴重な体験となっている。

⑦ 社会科見学

小学部3年では、ドバイの様々な施設（スーク（市場）、カプリソーネ工場、消防署）を訪問し、ドバイでの生活・文化・歴史について学習している。

⑧ 現地理解講座①（平成18年10月）

小学部中学年と中学部に対して、ドバイメトロの建設に関わっている日本企業の方たちに、講演をお願いした。ドバイの発展に伴い、道路の渋滞が大きな問題となり、その緩和策として、ドバイメトロが期待されている。このビッグプロジェクト（総額3,700億円）に日本の企業も深く関わっている。そのため、児童生徒の関心も高く、多くの活発な質問が出された。

⑧ 現地理解講座②（平成19年6月）

本校小学部1年から4年に対して、「UAEの日常生活について」の講演をUAEのローカルの方と結婚され、在UAE歴20年以上の邦人の方をお願いした。体験に基づくアラブ社会の生活を、日本との比較を交えて、具体的に分かりやすく話して頂いた。具体的な講話を聞き、現地理解を深める良い機会となった。

5. 学校運営理事会

DJSでは、学校運営理事会が日本人学校を経営し、理事会が学校運営上の最高意思決定機関である。

理事会は、ドバイ及びUAE北部日本人会を基盤として構成されている。構成員は、名誉理事（在ドバイ日本国総領事）、理事長（ドバイ及びUAE北部日本人会教育部長）、副理事長（ドバイ日本人学校長及び理事長が委嘱した理事）、在ドバイ日本国総領事館より1名、日本人会加入者の中から、専門部を構成するに必要な若干名（理事長及び日本人学校長からの推薦）、教頭、教務主任である。

理事会は月1回、定期的開催され、理事の方々は多忙な中であって、ボランティアとして出席され、各議題について、真剣且つ的確に議事を進めて頂いている。

議題としては、年間予算、施設設備の改善・補充、現地採用、雇用条件等、学校経営に関わる内容総てである。理事会における校長の立場は、学校運営に関わる実質的な責任者である。校長の具体的な業務内容としては、教育課程の編成と運用、派遣教員の人事及び服務管理、現地職員の採用と解雇、服務及び給与等についてのマネジメント、校地校舎の管理運営、借地契約の更改がある。対外的な業務として、文部科学省には、派遣教員の派遣申請、業績報告、校長会等、外務省には、補助金申請、在外公館には、児童生徒の安全面に関わる内容等について、日本人会からは、秋祭りや運動会等共催行事の協力要請、ドバイ教育局からの指示、指導等があり、その仕事は多岐にわたっている。

6. 学校評価

学校評価は内部評価、外部評価の二つの評価を行った。内部評価は、授業評価、行事評価、自己評価、業績評価がある。まず、授業評価は、管理職が日常的に行い、研究授業については、全教員で行った。行事評価については、行事ごとに内容及び取り組みについて行った。

自己評価は、年度当初に教員が自己の目標を設定し、その自己目標についての自己評価を行った。業績評価は、管理職が各教員の評価を行った。その際に、個人面談も実施し、自己評価、日常の勤務状況、個人面談の話しなどを基に総合的に判断していった。管理職の評価については、理事長が行った。

外部評価は保護者によるものである。外部評価は、学校評価、授業評価、行事評価とした。年度当初に、学校運営に関わる重点目標を、保護者全員に明らかにし、その目標についての学校評価を保護者に依頼し、記名でお願いした。記名方式にした理由は、評価について責任をもってもらうことと、個別に答える必要があるからである。

下記は学校評価の一例である。重点目標は3点に絞り、各項目4段階とし、自由記述の欄を設けた。

学校評価項目		十分である	不十分である
1	一人一人の力を伸ばす取り組み		
(1)	学校は、基礎・基本を重視し、一人一人の学習活動の充実を目指している。	A	B C D
(2)	学校は、少人数指導や個別指導等、学習指導法の充実に取り組んでいる。	A	B C D
2	児童生徒指導の充実		
(1)	学校は、自主性・自律性を育てることを目指している。	A	B C D
(2)	学校は、保護者と連携、協力、融合を図り迅速、誠実な対応をしている。	A	B C D
3	開かれた学校づくり		
(1)	学校は、学校情報の発信とホームページ充実に取り組んでいる。	A	B C D
(2)	学校は、授業参観、保護者との懇談を工夫し、取り組んでいる。	A	B C D
4	その他、お気づきになられたことやご意見がありましたらご記入ください。		
	<input type="text"/>		

保護者からの授業評価及び行事評価は、すべて自由記述とした。保護者からの評価を受け、理事会、職員会議で検討し、改善できる点は改め、学校側として譲れない点は、保護者に説明を行い、理解・協力を求めた。

外部評価を受けて改善した例として、英会話授業がある。児童生徒の英語の学習歴が異なっていること（日本からの転入生、他の日本人学校からの転入生、インター校からの転入生）等を考慮し、習熟度別クラス（3クラス）を導入した。これは理事会に諮り、学校独自ですぐに判断実施できた例である。

以上のように、DJSの学校運営において、学校評価を生かすことが出来た。

7. おわりに

私は校長として、2年間のDJSの学校経営を通して、「開かれた学校づくり」の重要性を改めて感じた。DJSでは、毎年度当初に、学校経営案を保護者に提案し、重点目標を具体的に明らかにする。そして、学期毎、授業参観・行事毎に学校を評価して頂き、それをふまえて、学校改善の取り組みを進めてきた。申すまでもなく、内部評価も実施した。学校での教育活動を全児童生徒、全教職員、保護者、学校運営理事会の方々と共に考え、取り組み、自校の学校文化を高めていき、それによって、児童生徒、教員、管理職、保護者、理事会の気持ちが一つになって、「よりよい学校づくり」をすることにより、「よりよい学校」が自ずと生まれてくるのだと肌で感じとった。

教育とは「誰のためものなのか」という基本的な姿勢を、いつも学校内外の人たちが持ち続けることが、何より大切だと思っている。現在の私には、DJSの明るく、生き生きとした児童生徒たちとこの2年間過ごしてきたこと、保護者、教職員、理事会が一丸となって、努力を惜しまずにDJSを発展させてきたことが、宝物として心にある。2007年度の当初に、「世界一の日本人学校を目指そう」と児童生徒会が、自らこのスローガンを掲げてくれた。そして授業、清掃はもちろんのこと、三人行事に汗と涙を流す姿、花一杯運動、地域の募金活動をしている児童生徒の姿を目のあたりにして大きな感動を受けた。

私が、DJSで実践してきたことを通して得たものを、今後、日本の学校で更に発展させていければと思っている。